

授業概要

初等教育・幼児教育・保育において必ず身につけるべき童話・昔話等の物語によって卒業論文を書く指導を行います。また、理解を助けるために様々な書籍（文学、民俗学、文化人類学、言語学、心理学、社会学など）を読み、研究のための教養を養う指導を行います。

授業は研究発表を中心に行い、それをもとに意見交換・討論・調査などを行い、これに基づいて指導します。図書館・博物館などの外部施設見学も行います。卒業論文を書く力を養うために、論作文練習の指導を行い、早いうちから各自に課題を出します。

- 卒業論文の例)・昔話「桃太郎」の歴史 ・地域の昔話とその絵本化 ・グリム童話の絵本化
 ・小学校国語教科書に掲載された童話・絵本 ・宮沢賢治『注文の多い料理店』をめぐって
 ・原作童話とアニメーションの比較研究 ・宮崎駿作品と原作童話との比較研究

授業計画

第 1 回	オリエンテーション	第 16 回	第二次卒論仮テーマの決定
第 2 回	第一次仮卒論テーマの決定	第 17 回	論作文指導4 章分け
第 3 回	論作文指導1 モチーフ	第 18 回	論作文指導5 概要
第 4 回	論作文指導2 例示	第 19 回	論作文指導6 具体性
第 5 回	論作文指導3 展開	第 20 回	研究の進め方1 まとめ方
第 6 回	研究の進め方1 文献	第 21 回	研究の進め方2 考察
第 7 回	研究の進め方2 ネット文献	第 22 回	研究の進め方3 比較
第 8 回	研究の進め方3 整理法	第 23 回	研究発表5 (日本の童話)
第 9 回	研究発表1 (世界の童話)	第 24 回	研究発表6 (日本の昔話)
第 10 回	研究発表2 (世界の昔話)	第 25 回	研究発表7 (日本の伝記)
第 11 回	研究発表3 (世界の伝記)	第 26 回	研究発表8 (日本の実話)
第 12 回	研究発表4 (日本の実話)	第 27 回	研究発表9 (日本の少年小説)
第 13 回	施設見学1 (国際子ども図書館)	第 28 回	施設見学4 (東京子ども図書館)
第 14 回	施設見学2 (相田みつを美術館)	第 29 回	施設見学5 (アンデルセン公園)
第 15 回	施設見学3 (ちひろ美術館)	第 30 回	施設見学6 (絵本展)

到達目標

(春期) 第一次仮卒業論文テーマによる論作文指導と研究調査、発表の練習をへて、秋期授業開始時に自分に適し、よりしぼった第二次仮卒論テーマを決定する力をつけます。

(秋期) 第二次仮卒業論文テーマによる論作文指導と研究調査、発表の練習をへて、4年生卒業論文授業開始時に、自身にとって最適で意欲がわく卒業論文テーマが決定できる力をつけます。

履修上の注意

授業態度、授業参加度を重視します。授業中に、毎回、研究発表を行い、その内容も評価に含めます。提出物がある時は、提出物も評価に含めます。童話(児童文学)・昔話を中心に多数の様々な書籍を読み研究発表を行うので、地道にコツコツと努力できる人に向いています。無断で発表を欠席した場合は、単位を放棄したものとみなします。

<発表例>ある童話(児童文学)・昔話について、どのような作品(ストーリー等)か、発表者はどのように考えるか、これまでどのような評価を得てきたか、教育の現場ではどのように読まれてきたか、どのように絵本化されているか、最もすぐれた絵本はどれか、子どもはどのように受容するか、などです。

これ以外に、卒論準備のために早いうちから各人に適した課題を出します。

予習・復習

研究発表を中心に行いますので、調査したり考察したりまとめたりする作業は、授業内だけでは不十分ですので、事前の自主学習が必要となります。また、研究発表の際に提示された問題点等を解決するための復習も必要となります。

評価方法

授業態度、授業参加度、研究発表、提出物(レポート等)
 研究発表 40% レポート 40% 受講態度 20%

テキスト

教材・参考書等は、授業中に指示します。

授業概要

教育の現場では、植物園や動物園、科学館などの社会教育施設の利用を伴う活動が近年多く見られる。その際、教師はこれらの施設の学習プログラムを単にそのまま利用するのではなく、十分な事前学習と周到な計画・立案を行った上で依頼する必要がある。本演習の前半は、こうした観点から、県内および近隣の社会教育施設等を取り上げ、理科教育・環境教育に関連した学習プログラムを実際に作成・提案することを通して、将来的な各種教育現場での実践力を身につけることを目標とする。

後半は、理科教育・環境教育に関する最新の情報を得る目的から、学会誌や専門書の輪読、科学実験を行う。これらを通して、さまざまな理科教育・環境教育分野の潮流と諸問題について検討を行い、卒業論文の土台づくりとしたい。

授業計画

第1回	前半オリエンテーション	第16回	後半オリエンテーション
第2回	環境と人間	第17回	理科教育・環境教育論文とは、発表の順番等の決定
第3回	理科教育・環境教育とは	第18回	発表の技法、資料の作り方
第4回	環境保全・環境創造と理科教育・環境教育	第19回～ 第29回	論文紹介・解説のプレゼンテーションと討議、卒論にむけて
第5回～ 第6回	学校教育現場における環境教育 ※学外活動		
第7回～ 第8回	社会教育施設の見学のための準備、計画		
第9回～ 第10回	社会教育施設の見学、資料収集 ※学外活動		
第11回～ 第12回	社会教育施設を利用した学習プログラムの作成		
第13回～ 第14回	学習プログラム提案のプレゼンテーションと討議		
第15回	前半まとめ	第30回	

到達目標

- ・社会教育施設等を用いた理科教育・環境教育に関連する学習プログラムの作成・提案を行うことができる。
- ・学術論文の内容や構成について要旨を作成して説明することができる。
- ・卒業論文のテーマの方向性を決定できる。

履修上の注意

本演習は、4年生の卒業論文につながるものであるため、卒業論文を理科や環境教育に係わる内容で作成しようという学生であること。

授業を土日に関り替えて、社会教育施設や小中学校の授業観察に行く予定である。したがって、指定した校外学習日に必ず出席すること。

班ごとの活動や個人発表が多くなるので、欠席しないことが前提になる。遅刻3回で欠席1回として扱う。また、20分以上の遅刻は欠席として扱う。

予習復習

本演習の単位修得には、プレゼンテーションや個人レポート作成のために授業以外の自主学習（予習）が必要となる。また、卒論に向けた活動ともなるので、授業内で得た知識を復習することも必要となる。

評価方法

授業中の態度、出席回数、プレゼンテーションへの取り組みと発表内容、個人レポートによって総合的に判断する。

自身のプレゼンテーションを欠席した場合、授業に無断で欠席した場合は評価の対象とはしないので十分注意すること。

テキスト

適宜印刷資料を配付する。

授業概要

教育者として、子どもの行動や心の成長・発達とその形成要因について理解し解決に向けて取り組むことは重要である。本演習では保育・教育現場の子どもの理解するために、子どもの背景にある家庭を中心とした環境の様子を知ることにより子どもについて理解を広げ、保育・教育や指導にも役立てることができるようにする。具体的には家庭と子どもの成長を把握するために関連する DVD の利用や心理検査の実施も行う。また、関連する資料や文献などの検討を行う。このような取り組みを通して学びを深めるとともに、卒業論文作成につなげていくことを目的とする。

授業計画

第 1 回	ガイダンス（春期のねらいと方針）	第 16 回	ガイダンス（秋期のねらいと方針）
第 2 回	子どもの理解に向けて	第 17 回	家庭・教育環境と子どものテーマ検討①
第 3 回	子どもの発達① 子どもの誕生と家族	第 18 回	家庭・教育環境と子どものテーマ検討②
第 4 回	子どもの発達② 潜在能力と家族	第 19 回	家庭・教育環境と子どものテーマ検討③
第 5 回	家族の関わり① 子どもの世界の変化	第 20 回	家庭・教育環境と子どもの研究紹介①
第 6 回	家族の関わり② 家族の発達の变化	第 21 回	家庭・教育環境と子どもの研究紹介②
第 7 回	子どもの発達と父親・母親の影響	第 22 回	家庭・教育環境と子どもの研究紹介③
第 8 回	父親の役割と実態	第 23 回	家庭・教育環境と子どもの研究紹介④
第 9 回	父親① 子育てと子どもの成長・発達	第 24 回	各自の研究成果報告と意見交換①
第 10 回	父親② 母親の子育てへの影響	第 25 回	各自の研究成果報告と意見交換②
第 11 回	父親③ 父親と家族の変化	第 26 回	各自の研究成果報告と意見交換③
第 12 回	保育・教育現場① 教師のクラス指導法	第 27 回	各自の研究成果報告と意見交換④
第 13 回	保育・教育現場② 教師との信頼感	第 28 回	卒業論文に向けた研究計画の立案①
第 14 回	保育・教育現場③ 家庭・地域との連携	第 29 回	卒業論文に向けた研究計画の立案②
第 15 回	学外授業を通してのまとめ	第 30 回	まとめ
		第 31 回	試験

到達目標

1. 子どもの成長・発達に及ぼす父親と母親、夫婦関係の影響について理解する。
2. 保育・教育者として家庭を含めた環境の重要性について理解を深め、保育・教育の可能性について視点を広げる。また、保育士・教育者として子どもへの関わり方を理解する。
3. 自己の取り組む卒論の位置づけを明確にする。
4. 卒論の内容についての構成と見通しを持つ。

履修上の注意

- ① 毎回話題が発展していくので、休まずに出席すること。
- ② 関心のあることを更に自分で調べ、理解を深めるように積極的に参加すること。
- ③ 毎回行われる内容についてわからないことがあるときは、その場で質問すること。
- ④ 内容によっては、レポートを課すこともある。

予習・復習

シラバスに基づいて演習が進行するので、事前に目を通し場合によっては調べること。特に、内容によっては文献が少ないので、最大限努力して文献・資料を探すこと。

評価方法

演習への取り組み（積極性）、レポートなどを加味して総合的に評価する。

テキスト

特に指定しないが、その都度必要なものを紹介する。
 [参考テキスト] 『父親の心理学』尾形 和男（北大路書房）2011 年

授業概要

この授業は、現代社会の課題の中から、授業履修者の興味のある問題について、個人研究を行っていく。そのためは、自らテーマ設定を行い、「調査・研究」をするための方法について学んでいき、研究することの意義とそのための活動を身につける。

本授業では、各自が関心を持ったテーマについて、どんな研究がなされているのか、先行研究を探し出し、その内容分析が適切に行えるようになる。また、学生各自が研究の対象とするものについては、とくに指定しないが、子ども発達学科の学生としての観点で見つけてほしい。

なお、実地的調査のため、年間数回の学外調査を予定している（土・日など）。

授業計画

第 1 回	授業を始めるにあたって	第 16 回	夏休み中の課題の発表①
第 2 回	学生の関心事について発表①	第 17 回	夏休み中の課題の発表②
第 3 回	学生の関心事について発表②	第 18 回	夏休み中の課題の発表③
第 4 回	研究とは何か	第 19 回	先行研究の分析と発表①
第 5 回	いろいろな研究手法について	第 20 回	先行研究の分析と発表②
第 6 回	論文を分析する①	第 21 回	先行研究の分析と発表③
第 7 回	論文を分析する②	第 22 回	先行研究の分析と発表④
第 8 回	論文を分析する③	第 23 回	先行研究の分析と発表⑤
第 9 回	各自の研究テーマを発表する①	第 24 回	学外調査を行う③
第 10 回	各自の研究テーマを発表する②	第 25 回	学外調査を行う④
第 11 回	各自の研究テーマを発表する③	第 26 回	学外調査を行う⑤
第 12 回	学外調査を行う①	第 27 回	学外調査のまとめ
第 13 回	学外調査を行う②	第 28 回	これまでの研究調査について発表①
第 14 回	学外調査のまとめ	第 29 回	これまでの研究調査について発表②
第 15 回	前半のまとめと後半の課題について	第 30 回	これまでの研究調査について発表③

到達目標

- ①現代社会問題から教育学的観点で課題を見つけ出せるようになる。
- ②研究テーマの先行研究を適切に探し出せるようになる
- ③先行研究論文を適切に読み、そこから問題点を見つけ出せるようになる。

履修上の注意

演習授業であることを理解し、発表等で穴を開けないようすること。
また、授業担当者は、歴史学及び社会学に関する立場で指導することになるので注意すること。
学外調査など、学外での授業があることを念頭に入れておく。

予習・復習

各回ごとに出された課題は、必ずおこなうこと。

評価方法

授業での発表や課題の結果を中心に総合的に判断する。

テキスト

学生各自の関心あるテーマに即した資料を配布し、また、参考図書を紹介する。

授業概要

(春期) 幼児と音楽の関わりの中から実践に役立つ音楽活動や特色ある音楽教育の理論と実践(楽曲演習を含む)を学び、幼児の音楽活動の視野を広げる。

(秋期) グループで物語性のある一連の楽曲および、アニメソングなど幼児教育で応用できる楽曲(連弾を含む)の演習、指導を行い、連弾を含むコンサートを開催することで、保育者として必要な音楽表現法を学ぶとともに、音楽表現の楽しさと企画を協力して行う協調性の必要性を経験する。

コンサートへの学びになる公演の見学も行う予定である。(2018年は新国立劇場バレエ団くるみ割り人形)

授業計画

第 1 回	前期オリエンテーション	第 16 回	後期オリエンテーション
第 2 回	幼児の歌唱曲の歴史	第 17 回	映画、テレビ、アニメソングの演習
第 3 回	幼児の歌唱曲の作曲家について	第 18 回	映画、テレビ、アニメソングの演習
第 4 回	歌詞に出る動植物について	第 19 回	楽器アンサンブル・連弾曲演習
第 5 回	生活の中での音への気づき	第 20 回	楽器アンサンブル・連弾曲演習
第 6 回	ダルクローズの音楽教育について・	第 21 回	連弾、コンサートのための演習
第 7 回	コダーイの音楽教育について	第 22 回	連弾、コンサートのための演習
第 8 回	オルフの音楽教育について	第 23 回	連弾、コンサートのための演習・準備
第 9 回	民族楽器、わらべうたについて	第 24 回	プログラム作成 案内、招待状作成
第 10 回	民族楽器、わらべうたの演習	第 25 回	学外公演への参加
第 11 回	音楽療法について	第 26 回	コンサートリハーサル
第 12 回	病院、施設における障害児の音楽療法、	第 27 回	ゼミ生によるコンサート
第 13 回	障害児の音楽療法の事例	第 28 回	論文の書き方・研究の方法、
第 14 回	障害児の音楽療法の事例	第 29 回	卒論にむけて個々のテーマの相談
第 15 回	特色ある保育の実践例	第 30 回	まとめ。卒論計画について

到達目標

- ・ 障害児を含む幼児教育。保育の対象者へむけての、様々な教材と指導法の演習から、保育・教職での実践に役立つ音楽活動の視野を広める。
- ・ 特色ある音楽教育の方法の理論と実践を学び、さまざまな幼児の音楽活動を学ぶ。
- ・ 連弾を通し、アンサンブルや音楽の楽しさを共有し、豊かな表現力を培う。
- ・ 演奏会の企画・準備・演奏を通し、保育現場での対外行事への学びと協調性を養う

履修上の注意

授業準備を自主的に行い、ゼミ生としての積極性、協調性を重視する。
演奏会準備では授業時間外に個人指導、レッスンをを行う。

予習復習

各自コンサートに向けての準備、練習が必要である。

評価方法

授業内課題、演奏会などを総合して評価する

テキスト

参考書『幼児の音楽教育－音楽的表現の指導－』朝日出版(音楽実技ⅠⅡで使用した教科書)
プリント資料・プリント楽譜

授業概要

小学校での授業を想定し、教室で教えることや学ぶことへの改善の方法、教育メディアの開発やその利用等について、教育工学的な視点から理解し、実践できる資質能力の形成を目指す。また、学び続ける教師をテーマに、研究を深める。これらを通して、身近な教育や学習の問題を具体的に解決する能力の形成を目指し、卒業論文作成にむけての準備を進める。

授業計画

第 1 回	オリエンテーション	第 16 回	再び、学びとは
第 2 回	よい授業、授業のねらいと評価	第 17 回	教師の成長、学び続ける教師
第 3 回	よい授業、教育工学の視点	第 18 回	教師を知る
第 4 回	よい授業、学びとは	第 19 回	実践を捉える
第 5 回	よい授業、学びへの期待の変遷	第 20 回	実践研究とは
第 6 回	インストラクショナルデザイン①	第 21 回	授業研究とは
第 7 回	インストラクショナルデザイン②	第 22 回	研究をしてみたいこと
第 8 回	インストラクショナルデザイン③	第 23 回	研究をすることは
第 9 回	教師の意思決定	第 24 回	研究の方法①
第 10 回	動機づけ	第 25 回	研究の方法②
第 11 回	メディアとは	第 26 回	研究の構想を語る①
第 12 回	メディアと教育	第 27 回	研究の構想を語る②
第 13 回	メディアと資料	第 28 回	先行研究のレビュー①
第 14 回	メディアを活用した授業	第 29 回	先行研究のレビュー②
第 15 回	情報教育	第 30 回	来年度に向けて

到達目標

- ①教育工学的手法によるインストラクショナルデザインの手法を、具体的な事例をもとに説明することができる。
- ②教育メディアの働きや視聴覚・放送教育に関する知識やスキルを習得し、それを示すことができる。
- ③メディアを活用した学びの有効性について、具体的な事例をもとに説明することができる。
- ④これらの成果を活かし、卒業研究に向けての研究に対する姿勢を確立する。

履修上の注意

前半の学修内容をもとに、後半の研究を進めるので、前半の学びを大事にする必要がある。受講者の興味関心にもとづき、前半の内容はそれに合わせて変更することもあり得る。協同学習が中心となるので、遅刻はないように努力すること。

予習復習

前半では指示された次時への準備を十分に行うことが、後半では自身の課題として自ら考え、実践をすることが求められる。特に、後半では主体的に文献や資料等の情報収集に取り組む必要がある。

評価方法

予習と復習の有無やその成果、演習での討議への参加度、文献や資料の情報収集、レポート等を総合的に評価する。

テキスト

教科書は使用しない。
ただし、参考文献等は演習の際、紹介をする。

授業概要

この演習は「卒業研究」の前段階として、造形表現の発達段階と特性を理解するとともに、子どもの造形活動の指導・支援に必要な基礎的知識と技能を幅広く身に付けることを目標とする。また造形指導者として、子どもの要求にふさわしい援助を与えるための指導法の研究と、豊かな表現を促すための材料・用具などの取り扱いについて、製作体験を通して学習していく。

授業計画

第 1 回	材料経験の内容と方法	第 16 回	創造力を育てる遊具
第 2 回	①平面表現（素描，水彩，絵本づくり）	第 17 回	・仕掛けのあるおもちゃ（木のおもちゃ，玩具など）
第 3 回		第 18 回	
第 4 回	②立体表現（パ・パ・スカルプチャー、粘土型取り運動会メダルなど）	第 19 回	・大型遊具のデザイン
第 5 回		第 20 回	
第 6 回	学外活動—美術館鑑賞—	第 21 回	マルチメディアを用いた映像表現（クレイアニメ，ライトファンタジー）
第 7 回	材料体験の内容と方法	第 22 回	
第 8 回	③伝承の遊び（飛び出すしかけ絵本，折り紙，おもちゃ）	第 23 回	海外の子どもの造形表現と鑑賞教育（ヨロッパ，南米，アジア，アフリカ）
第 9 回		第 24 回	
第 10 回	幼・保・小学校の連携と総合的な活動（紙芝居，パネルシアター，ペープサート，影絵など）	第 25 回	学外活動：親子を対象とした造形ワークショップ
第 11 回		第 26 回	
第 12 回		第 27 回	
第 13 回	幼児・児童画の見方	第 28 回	研究課題：模擬保育・指導計画の設定→製作活動の導入→展開→まとめ，評価と反省会
第 14 回	—発達段階による表現の変化—	第 29 回	
第 15 回	課題発表	第 30 回	

※美術館学芸員による鑑賞会及び、公共施設にて親子を対象としたワークショップの開催を予定

到達目標

- ・材料をもとにした造形活動を楽しみ豊かな発想をするなどして、自らの造形表現を高める。
- ・教育・保育者としての造形活動を指導・支援する為の知識や、基礎となる技能を習得する。
- ・研究テーマを設定して、継続的（次年度 4 年次）に研究計画を遂行する能力を養う。

履修上の注意

課題に対して主体的な取り組みを心掛け、地道な努力の積み重ねを目指す。手先の器用さよりもむしろ時間をかけた丁寧さと根気強さが求められる。教員・学生同士との対話的で深い学びを目指す。

予習復習

造形の実践力を高めるために、公立美術館・公共施設等を利用したワークショップ、学園祭などの参加を検討。ファシリテーター（促進者）として、子どもとの関わりを持つ場面に積極的に参加（材料集めなども含む）することを望む。

評価方法

課題に取り組む態度，製作した作品の質と量，ゼミ単位でのワークショップ・ボランティア活動，製作レポートの内容により評価する。

テキスト

必要に応じて資料を配布する。

授業概要

本ゼミナールでは、「子どもの健康」をキーワードとして、卒業論文を書くための研究を進めていきます。また、同時に保育に関する基本的な技術、能力を高め、実習、就職へとつなげていくことのできる能力を身につけていくことを目的とした演習を展開していく予定です。

授業計画

第 1 回	オリエンテーション	第 16 回	オリエンテーション
第 2 回	レポート①～作成	第 17 回	レポート③～作成
第 3 回	レポート①～発表	第 18 回	レポート③～発表
第 4 回	レポート①～発表	第 19 回	レポート③～発表
第 5 回	レポート②～作成	第 20 回	研究テーマ①
第 6 回	レポート②～発表	第 21 回	研究テーマ②
第 7 回	レポート②～発表	第 22 回	文献の探し方①
第 8 回	保育実践研究①	第 23 回	文献の探し方②
第 9 回	保育実践研究②	第 24 回	卒論研究①
第 10 回	保育実践研究③	第 25 回	卒論研究②
第 11 回	保育実践研究④	第 26 回	卒論研究③
第 12 回	保育実践研究⑤	第 27 回	卒論研究④
第 13 回	保育実践研究⑥	第 28 回	卒論研究⑤
第 14 回	保育実践研究⑦	第 29 回	研究結果発表
第 15 回	まとめ	第 30 回	まとめ

到達目標

- ・グループで協力しながら、課題に取り組むことができる。
- ・卒業論文のテーマを決めることができる。

履修上の注意

グループ学習、発表などがあるので、協調性が必要となります。

発表のための練習等により、時間外での活動が必要になってくる可能性があります。その際にも、「協調性を最重視し、アルバイトなど自己都合をできる限り変更することができる学生の履修を望みます。

- ① ゼミ合宿や保育所での学外研修を行うことがあります。
実施することになれば、日程を調整しますので、必ず参加してください。また、費用がかかりますので、準備をしてください。
- ② 卒業論文の研究テーマは、私の研究分野（体育学—発育発達）を中心とした内容に限られます。ある程度、卒論テーマをイメージした上で、ゼミを選択するようにしてください。
- ③ パソコンを使った授業を行います。
基本的に授業内で課題を指示します。授業内で終わらなかった課題については、復習をかねて授業時間外で学習してもらいます。

予習復習

事前に配布した資料を読んでくる。また、復習用の課題を出すので、次週までに提出する。

評価方法

発表内容、研究内容と意欲的に学ぼうとする態度を総合的に評価します。

テキスト

特に、指定しない。

授業概要

保育者として子どもたちに豊かな音楽体験を提供できるようになるためには、実際の体験を通して音楽的視野を広げ、自己の音楽的感性を養い音楽的スキルを高めることが必要である。3年次には、篠笛、三味線など和楽器の体験や長唄を唄うなどの表現活動を通して日本の伝統的な音楽に親しみ、4年次の表現活動につながるよう指導する。

卒業研究題目例 「小学校の歌唱共通教材から消えた歌唱曲の復活」「三味線に親しもうー小学校教育における総合的学習活動の中で」「わらべうたがもたらす子どもへの影響」「幼児期の音楽活動を通じた情操教育について～日本人として心豊かに育つために」

授業計画

第 1 回	ガイダンス	第 16 回	和楽器を用いた合奏1
第 2 回	篠笛の奏法1	第 17 回	和楽器を用いた合奏2
第 3 回	篠笛の奏法2	第 18 回	発表会
第 4 回	篠笛の奏法3	第 19 回	保育現場における表現活動について1
第 5 回	篠笛合奏1	第 20 回	保育現場における表現活動について2
第 6 回	篠笛合奏2	第 21 回	保育現場における表現活動について3
第 7 回	篠笛合奏3	第 22 回	参考書物による研究1
第 8 回	三味線の奏法1	第 23 回	参考書物による研究2
第 9 回	三味線の奏法2	第 24 回	参考書物による研究3
第 10 回	三味線の奏法3	第 25 回	卒業研究へ向けてグループワーク1
第 11 回	三味線の奏法4	第 26 回	卒業研究へ向けてグループワーク2
第 12 回	三味線の奏法5	第 27 回	卒業研究へ向けてグループワーク3
第 13 回	長唄1	第 28 回	卒業研究へ向けてグループワーク4
第 14 回	長唄2	第 29 回	発表会
第 15 回	実技試験	第 30 回	まとめ

到達目標

篠笛、三味線など和楽器の基本的な奏法を身につけ、平易な曲を演奏できるようになる。
子どもたちが豊かな音楽体験ができるような表現活動の指導についての工夫ができる。

履修上の注意

歌を歌うことや演奏すること、そして工夫することが好きであること。
目的意識を持って積極的に取り組み、自己課題は責任を持ってやりとげること。
文献研究やレポート作成などに関心を持って取り組むこと。
学外活動を行う場合があり、それに伴い多少の経費がかかることもある。

予習復習

課題となる曲の自己練習を必ず行うこと。

評価方法

出席状況、課題への取り組み、レポート作成、発表会での演奏を総合して評価する。

テキスト

楽譜、資料を配布する。また、必要に応じて指示する。

授業概要

専門演習ではグループ毎に自由にテーマを選択し、研究を実際に協同して行いながら、1.文献検索等の情報収集方法、2.保育・幼児教育分野に適した社会調査法、3.学術論文および報告書の作成方法、4.プレゼンテーションの方法等から、卒業論文作成に必要な方法論を体系的に学んで行く。また、その過程における文献レビューやディスカッション等を通じて、興味を持っている分野について科学的な視点で改めて向き合うことで、より具体的なテーマを発見し、卒業論文演習へ繋げていくことを目的とする。

授業計画

第1回	オリエンテーション	第16回 ～ 第19回	定性的調査の講義と演習：グループインタビューをしてみよう！
第2回 ～ 第3回	興味がある分野やテーマの確認(現状で把握している情報に対する考察)	第20回 ～ 第21回	データ解析の方法(文章のまとめ方、グラフや表の書き方)
第4回 ～ 第5回	文献の検索方法および読み方	第22回 ～ 第24回	全体研究報告書の作成とプレゼンテーション
第6回 ～ 第7回	定量的調査方法が用いられた文献レビューとディスカッション	第25回 ～ 第27回	卒業論文に向けた研究計画の立案
第8回 ～ 第9回	定性的調査方法が用いられた文献レビューとディスカッション	第28回 ～ 第29回	研究計画の発表
第10回 ～ 第14回	定量的調査の講義と演習：アンケートをしてみよう！	第30回	秋期まとめ
第15回	春期まとめ		

到達目標

保育・幼児教育分野における科学的なリテラシーを涵養しながら、卒業論文にむけたテーマを発見し、研究計画を立案する。

履修上の注意

- ・ 討論・演習において主体的に取り組める学生の履修を望む。
- ・ 原則として毎回出席すること。遅刻・欠席の場合は都度対処するので必ず連絡すること。
- ・ 授業内における一人ひとりの発言は貴重な情報である。どの様な内容であっても互いに否定的に捉えないことをルールとする。
- ・ 文献レビューの準備等、授業外での課題にも積極的に取り組むこと。

予習・復習

事業時間外での課題を複数回課す。

評価方法

出席、講義内の討論における積極性、文献レビュー等の課題から総合的に判断する

テキスト

特に指定しない。必要となる文献等については適宜授業内で告知する。

授業概要

子どもの特徴に合わせた柔軟な支援や発達援助の知識・技能を身に付けるため、「障害を含む様々な事情により配慮が必要な子ども」や「子どもの行動に影響する心理特性」を主なテーマとします。専門演習では、ゼミのテーマについてディカッション等により学習しながら、興味のあるテーマを探っていきます。また、卒業論文作成に必要な技能（情報収集の方法、データの獲得方法、論文のまとめ方、プレゼンテーションの方法など）の獲得を目指します。過去の卒業論文では、次のようなテーマがありました。

【テーマの例】

- ・発達障害児・者との接触経験の有無が発達障害のイメージにどのように関連しているか
- ・子どものヒヤリハット場面における大学生の重大さの認識と対策について
- ・大学生における保育者効力感が子どものやる気を促す関わり方に及ぼす影響
- ・自己主張・自己抑制と幼児期の癇癢の関係
- ・保育園・幼稚園での気になる子／障害児への対応について

授業計画

第 1 回	オリエンテーション	第 16 回	オリエンテーション
第 2 回	子どもの心理特性について①	第 17 回	春期の振り返り
第 3 回	子どもの心理特性について②	第 18 回	研究法の理解（質問紙など）①
第 4 回	ディカッション	第 19 回	研究法の理解（文献調査など）②
第 5 回	障害等がある子どもについて①	第 20 回	研究法の理解（その他）③
第 6 回	障害等がある子どもについて②	第 21 回	研究テーマの検討①
第 7 回	ディカッション	第 22 回	研究テーマの検討②
第 8 回	配慮が必要な他の子どもについて①	第 23 回	文献収集と情報整理①
第 9 回	配慮が必要な他の子どもについて②	第 24 回	文献収集と情報整理②
第 10 回	ディカッション	第 25 回	文献収集と情報整理③
第 11 回	研究の進め方	第 26 回	研究方法の検討①
第 12 回	テーマ探し、文献収集①	第 27 回	研究方法の検討②
第 13 回	テーマ探し、文献収集②	第 28 回	卒業研究の構想発表①
第 14 回	発表	第 29 回	卒業研究の構想発表②
第 15 回	まとめ	第 30 回	まとめ

到達目標

障害を含む様々な事情により配慮が必要な子どもを、心理特性の観点から理解し、それを踏まえた保育・教育を考えられる。人の学習や行動について科学的に考える視点を持てる。

履修上の注意

- ・協働学習やディカッションなどを行ないませんが、そのような活動が苦手な場合は相談してください。
- ・他者のテーマに関心を持つこと。ディスカッション等では、他者の話を良く聞くこと。
- ・資料作成にはパソコンを使用します。オフィス系ソフト（文書作成、表計算、プレゼンテーション）、インターネット検索などのスキルを身に付けようとする努力は必要となります。
- ・遅刻3回で欠席1回として扱います。また、遅刻・欠席の場合は連絡を入れてください。
- ・学外調査を行う場合があります。

予習・復習

調査や発表準備・練習のために授業時間外で自主学習が必要となります。

評価方法

発表の内容やどの程度よく伝わるか、各自のテーマの進行状況によって評価します。

テキスト

テキストは指定しません。適宜資料を配布します。

授業概要

子ども、家族、社会について、社会学、ジェンダー学の視点から考えていきます。毎回、仲間とともに文献を読みそれについて議論する、その積み重ねのなかで自分が「本当に」やりたいと思う卒論テーマを見つけることができます。また、論文執筆に必要な知識や態度、マナーやルールを身につけることができます。

現4年生が取り組んでいる卒論タイトルは以下の通りです。「愛着障害に苦しむ子どもたち」「自尊感情が子どもの反応に及ぼす影響」「男性が父親になるとき」「ろうの親、聴の子ども」「ひきこもりの子を持つ親への支援」「同性婚のいまと未来」「日本における在日外国人差別」「障害と合理的配慮」。また、現3年生は卒論の準備として各自の関心にもとづき「子ども虐待」「戦時下の子ども」「きょうだいの育ちのちがひ」「父親の育児参加」「世界の保育」「デートDV」「差別とマイノリティ」といったテーマに取り組んでいます。

授業計画

第1回	オリエンテーション ゼミの進め方	第16回	研究の進め方
第2回	論文を執筆するための心得	第17回	問題関心のありか
第3回	研究を進めるための心得	第18回	研究課題の検討
第4回	記事検索と資料の調べ方	第19回	先行研究の調べ方
第5回	文献の読み解き方と報告のやり方	第20回	先行調査の調べ方
第6回	文献講読と議論1	第21回	参考文献リストの作成
第7回	文献講読と議論2	第22回	研究方法の検討
第8回	文献講読と議論3	第23回	分析方法の検討
第9回	文献講読と議論4	第24回	研究計画の報告1
第10回	文献講読と議論5	第25回	研究計画の報告2
第11回	文献講読と議論6	第26回	研究計画の報告3
第12回	グループディスカッション	第27回	研究計画の報告4
第13回	関心あるテーマへのアプローチ1	第28回	研究計画の報告5
第14回	関心あるテーマへのアプローチ2	第29回	全体討論
第15回	後期に向けて	第30回	4年次の卒論演習に向けて

到達目標

文献を読み解く力を身につける。
 研究をすすめていくために必要な知識や態度、マナーやルールを身につける。
 仲間と議論することで自らの考えを鍛える。
 議論をとおして相手の考えを理解するという態度を身につける。
 自らの問題関心を深め、卒業論文のテーマを決める。

履修上の注意

報告や課題に積極的に取り組む態度が求められる。
 議論に活発に参加することが求められる。
 仲間の意見を尊重し、自分の意見もしっかりと伝えるコミュニケーション能力が求められる。

評価方法

出席は当然重要である。
 そのうえで、ゼミでの報告態度や報告内容、議論への参加態度、課題レポート等で、総合的に判断する。

テキスト

とりあげる文献については、ゼミ生と相談のうえ、初回のゼミで決める。

授業概要

教育に関する制度的・社会的・歴史的な問題に関心のある学生を対象に、卒業論文作成につなげるべく学習を進めていく。

春期は、学術論文の基本を解説するとともに、教育を批判的に（≠ネガティブに）とらえるための視座を形成すべく、文献を講読する。合わせて、各人の関心に基づき卒業論文に向けた先行研究の収集を進める。

秋期は、先行研究との向き合い方を各人の用意する先行研究の論文を相互に検討することを通して学ぶとともに、卒業論文構想の発表を中心に進めていく。最終的に、卒業論文の予稿（①目次、②全体の概略あるいは序章にあたる部分）を完成させることを目指す。

授業計画

第 1 回	オリエンテーション（ゼミの進め方）	第 16 回	先行研究批判の方法
第 2 回	学術論文とは	第 17 回	先行研究批判とテーマの設定
第 3 回	文献・資料収集の方法	第 18 回	先行研究の検討（1）
第 4 回	史料批判とは	第 19 回	先行研究の検討（2）
第 5 回	共通文献講読（1）	第 20 回	先行研究の検討（3）
第 6 回	共通文献講読（2）	第 21 回	先行研究の検討（4）
第 7 回	共通文献講読（3）	第 22 回	先行研究の検討（5）
第 8 回	共通文献講読（4）	第 23 回	先行研究の検討（6）
第 9 回	共通文献講読（5）	第 24 回	卒業論文構想の発表（1）
第 10 回	共通文献講読（6）	第 25 回	卒業論文構想の発表（2）
第 11 回	共通文献講読（7）	第 26 回	卒業論文構想の発表（3）
第 12 回	先行研究の収集状況の報告（1）	第 27 回	卒業論文構想の発表（4）
第 13 回	先行研究の収集状況の報告（2）	第 28 回	卒業論文構想の発表（5）
第 14 回	先行研究の収集状況の報告（3）	第 29 回	卒業論文構想の発表（6）
第 15 回	先行研究の収集状況の報告（4）	第 30 回	卒業論文に向けて

到達目標

- ・教育という事象を客観的、批判的にとらえることのできる資質を養う。
- ・学術研究を進める上で必要な能力を養う。
- ・卒業論文に向けた構想を構築する。

履修上の注意

4 年次の卒業論文に向けた作業を進めるのだから、主体的に課題に取り組むのは最低条件である（そうでなければ 4 年次に泣きを見るだけである）。

ゼミにおける発表は相互研鑽の機会であり、発表者でないときも質疑応答や討論に積極的に参加すること。

履修者のレディネスにもよるが、文献調査のための学外実習（国立国会図書館見学）を実施する可能性がある。

予習・復習

1 年間で最低 4 回の発表の機会があるが（人数によっては 5 回以上）、発表の準備はすべて授業時間外に実施してもらう。

卒業論文のための文献・資料収集も同じである。

評価方法

発表内容（50%）、質疑応答や討論への参加度（20%）、卒業論文の予稿（30%）

テキスト

講読する共通文献は現在検討中だが、1000 円以内の新書・文庫から担当者が選定する。詳細は初回授業時に示す。

授業概要

研究方法として、自らのテーマに関して心理学的視点から調査研究を行うための基礎的な方法について指導を行う。テーマや対象については特に限定しない。グループでの議論や文献調査を行い、自らの興味・関心、疑問を抱いているテーマが何かを明確にする。また、教員からは、幼児や家族の心理学、臨床心理学の文献や映像作品などについて提示し、テーマ設定に関する考察を深める。関心あるテーマについて基本的には個人で文献やフィールドワークでの情報収集、調査を行い、得られた結果をグループに発表する。状況により、グループにて学外でのグループワークやフィールドワークなどを行う可能性がある。外部講師を招聘する可能性がある。【現在の3年生の研究テーマ例】“子どもの効果的な叱り方”、“仕草から相手の心理をみる方法”、“恋愛心理について”、“メンタリストに関する研究”、“第一印象の作り方について”

授業計画

第 1 回	春期オリエンテーション	第 16 回	秋期オリエンテーション
第 2 回	グループ活動	第 17 回	グループ活動
第 3 回	各自の興味・関心と研究について	第 18 回	個人研究のテーマの発表
第 4 回	心理学的研究法とは	第 19 回	個人研究に関する先行研究探索①
第 5 回	各種研究法を学ぶ①	第 20 回	個人研究に関する先行研究探索②
第 6 回	各種研究法を学ぶ①	第 21 回	中間発表
第 7 回	心理学的テーマに関する映像鑑賞	第 22 回	研究計画の立案に関する講義
第 8 回	映像作品からの問題設定	第 23 回	データ解析の基礎演習
第 9 回	問題に関する文献（フィールド）調査①	第 24 回	データ解析の基礎演習
第 10 回	問題に関する文献（フィールド）調査②	第 25 回	研究計画の立案
第 11 回	中間発表	第 26 回	研究計画の立案
第 12 回	問題に関する文献（フィールド）調査③	第 27 回	研究計画の立案
第 13 回	レポート作成	第 28 回	研究計画の立案
第 14 回	レポート提出と個人テーマ設定	第 29 回	研究計画の立案
第 15 回	春期のまとめ	第 30 回	まとめ・卒業論文について

到達目標

- 心理学的視点による課題設定、具体的な研究方法やデータ解析法について習得する。
- ディスカッションやプレゼンテーションを通じて自分の意見を論理的に説明するスキルを習得する。
- 卒業論文のテーマの明確化と研究計画の作成、論文作成に必要な文章作成力を身に着ける。

履修上の注意

個人またはグループの調査・研究への積極的な姿勢、またはグループでの議論や作業において他の参加者との協力や円滑な活動をしようとする姿勢を重視する。遅刻は3回で、1回欠席とみなす。

予習・復習

自分のテーマに関する調査を行い、演習メンバーに対して研究発表を行うため、発表の準備やメンバーからの指摘について復習する作業が重要となる。

評価方法

課題や授業への積極性や態度、研究発表や提出物（レポートなど）の内容、出席状況等から総合的に判断する。

テキスト

授業内で指示する。